

各企業の考え方

□ 算定を行う背景・目的

2009年にCDPに参加し、2010年よりScope3排出量の報告を行っている。Scope1,2排出量も含め、算定を行うことそのものに意味があるのではなく、削減に向けたアクションをとることが重要である。

□ 算定方法

サプライチェーン排出量の算定方法としては、製菓、飲料、酪農食品、果物、健康食品などの製品ベースでのLCAを行うことで、上流、下流ともに算定を行っている。自らのサプライチェーンの内、インパクトの大きいカテゴリを見極めて重点的に取り組んでいる。

□ 社内の算定体制

各事業所から集められたLCAに必要なデータを取り扱っているチームは10人程度で構成されている。このチームでは安全、健康、環境に関する社内の情報を取り扱っている。

Packaging Impact Quick Evaluation Tool (PIQET)、Global Environmental Footprint Tool (GEF Tool)などのLCAツールを開発しており、このようなツールにデータを入力することで算定を行っている。

□ 算定結果の活用方法



LCAの結果としてGHGだけではなく様々な環境負荷を同時に評価しており、これらの一部をCreating Shared Value Report (CSV Report)において公表し、ステークホルダーとのコミュニケーションを図っている。

また、商品のバーコードをスマートフォンで読み込むことで、その製品の環境情報が表示されるようなアプリが開発されている。

□ 算定のメリット

その他の環境負荷も含め、Nestleが環境に与える影響をライフサイクルで評価することで、どの段階の負荷をメインターゲットとして削減の取組を行うべきかが明確になる。

各企業の考え方

□ サプライチェーン排出量の削減に向けて

- 農家へのバイオガス技術の導入や環境負荷の低い農業の教育など、サプライヤーに対する技術提供やトレーニングを行うことでサプライヤーがよりサステナブルな事業活動を行う手助けを行っている。
- 2015年までに、購入するコーヒー豆の全てを自らが設定した基準である、Common Code for the Coffee Community (4C)を満たすものを目指すことを目指している。

□ サプライチェーン排出量算定の課題

- サプライヤーとともにサプライチェーン排出量の算定に取り組んではいるものの、全てのサプライヤーからデータを収集することは容易ではないため、多くの場面で排出原単位が必要になる。しかし、食品や農業に関する原単位は十分には整備されておらず、より正確な原単位が整備されることが重要なキーになる。そのため、欧州委員会が行っているLCAのパイロット事業に参加し、PCRの標準化を行っている。
- このようなLCAの取組を進めていくためには、社内に科学的な知見を持った人材を持ち、ステークホルダーともコラボレートすることが重要であり、そのような人材育成を進めるとともに、市民や政府との連携も深めている。

□ これからサプライチェーン排出量を算定する方へ

- GHGプロトコルのScope3スタンダードに基づき、Scope1,2,3の考え方を十分に理解する必要がある。
- Scope3のどのカテゴリーが自らの事業活動において重要であるかを分析する。
- サプライヤーから直接データを収集することは容易ではないため、二次データを使った概算を行うことも時には必要であり、徐々にサプライヤーとの協働やより正確なデータ収集などによって算定の精度を高めていくことが望ましい。

